

越中五箇山に麦屋祭りを見に行く。

岡 哲文

二〇一二年九月二三〜二四日。南砺市下梨、地主神社内。

合掌造りの里として、岐阜県白川郷と共に世界遺産に認定された五箇山はまた、民謡の宝庫でもある。こきりこ節は、大方の人間なら誰でも一度は聞いたことがあるかもしれない。私も、小学校の音楽で習ったことを、五箇山を訪問して思い出した。こきりこ節以外にも、麦屋節、お小夜節、といちんさ、などなど、五箇山を訪問すると様々な民謡を聞くことができる。

二〇〇五年九月、私はこきりこ祭りを見に行った。その時、その前日に「麦屋祭り」というのがあることを知った。麦屋節もこきりこ同様、五箇山で非常にしばしば演じられる。紋付き袴に脇差を差し、たすきをかけ、編み笠を廻しながら、哀愁あるメロディーを勇壮に踊る。五箇山一帯は平家の落ち武者の里として有名であり、平家の落人がわが身の悲運を嘆き歌ったとも、前回南京玉すだれの回の最後に少し言及した、能登の遊女、お小夜が伝えたなど、様々な伝説がある。

麦屋節は越中おわら節、こきりこ節と並んで富山県三大民謡の一つとして一九七三年（昭和四八）に国の選択無形文化財に認定された。昨年南京玉すだれ全国大会から帰宅してから、来年は麦屋祭りを見に行こうと決心した。

前回、こきりこ祭りの時は、三か月前に宿を申し込んだら、もうすでにどこも満室で、かろうじて少し離れた菅沼の宿に泊まることができた。だから今回は「善は急げ」とばかりに三月になじみの宿、弥次兵衛を押えることにした。さすがにこの時点ではまだ余裕があったため、今回は弥次兵衛などなじみの宿をはしごしながら五箇山に滞在した。

下梨は、合掌造り集落の相倉、村上家等がある上梨から離れており、バスの便も不自由なため、いずれも宿泊先の宿の車で送っていただいた。地主神社付近は屋台が連なり、他にも地元の人が弁当、五箇山豆腐のみそ田楽や油揚げなどを販売する店が出ている。昼の部のど自慢、講習会などは自由席だが、夜の舞台共演はいずれも指定席で、宿で券を取ってもらおうか、受付で自分が購入するしかない。私は両日とも宿で券を押えてもらった。この券がないと、一般人は中に入ることはできない。当日券もかなり販売されているようにみえて、当日購入する人をたびたび目撃した。また、この祭りを見るために全国から人が訪れる。のど自慢や笠踊りコンクールの出演者の出身地も実に様々だった。

一日目、九月二三日。（日）。麦屋祭り初日。

朝一〇時から、麦屋節踊り講習会が行われるが、一一時三〇分の奉納麦屋節に合わせる

ように宿を出た。踊りは越中五箇山麦屋節保存会によって行われる。境内に社殿があり、麦屋祭りの提灯が下げられ、鳥居から道路を隔てて南砺市平行政センターに向かう道の片隅に麦屋祭りのぼんぼりと、大きな幟が翻っていた。社殿の踊りは、立ち見である。私が行ったら、すでに前列は人だらけで、後ろの方から眺めるしかなかった。麦屋節以外に、早麦屋、四つ竹節が披露される。男性の踊りのみならず、女性の踊りも奉納される。オレンジ色の狩衣に袴姿、また、黒で袖部分に派手な模様のある着物を着た女性たちが踊る。

この後、境内横に舞台と座席が作られており、そこで正調麦屋節のど自慢コンクールと、民謡子供会が行われた。夜の舞台共演以外、座席は自由なので、好きな席に座る。子供の民謡は、全員地元の小中学生だった。



写真は神殿での早麦屋、男性の麦屋節、女性による四つ竹踊り。

それから越中五箇山麦屋節保存会による笠踊りと更にゲストということで、隣石川県金沢市の天保流れ節保存会による民謡披露が行われた。

一七時から、獅子舞祭りが披露された。この獅子舞は、豪雪地帯として有名な五箇山で、春の訪れを喜んで、大体四月ごろから各集落で行われる。シシの相手をする「シシトリ」は子供が行う。カルサンを履き、白いフサフサした毛のシヤグマをかぶり、シシと共に激しい踊りを踊る。本来春に行われるが、今回は特別に披露される。但し、全部で二〇分ほどである。

二〇〇九年春に、私は相倉の獅子舞祭りを見に行ったけれど、それはかなり長い時間踊られた。社殿の前で会長さんが大きな紙を持って立ち、口上を述べる。

「目録ひとくくつ 御酒一万樽、御魚は日本海に有合い 金銀沢山富士山のごとし 人氣栄当栄当 右は以上。〇〇村の〇〇様より〇〇村保存会に下さあくくく」(引用 『越中五箇山平村村史』昭和六十年発行 国立国会図書館蔵より。)と、何だか変わった節回しを述べる。その度ごとに、村の関係者から、やんやの喝さいが入る。口上を二回ぐらい述べた所で獅子舞祭りは終わりになる。



写真 シシとシシトリの少年二人による獅子舞。

この後、十九時よりいよいよ舞台共演である。それまで時間があるため、宿の車で向かいに来てもらい、宿で夕食を済ますことにする。舞台共演が終わるのが二時過ぎになつてしまい、迷惑をかけるからである。

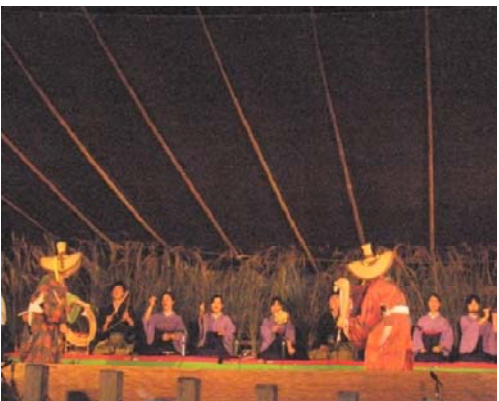
舞台共演が開始する。席は前述の通り指定席なので、あらかじめ宿で手配してもらった券に書いてある番号に座る。ほぼ満席状態だった。

最初は、地元平高等学校郷土芸能部による民謡の披露が行われた。この高校は五箇山に伝わる郷土芸能を若い世代に伝えようと、郷土芸能部が存在する珍しい高校で、その実力はかなり高く、東京を始め、あちこちで披露をしている。有名なこきりこを皮切りに「早麦屋」という女性の踊り手による、リズムカルな踊り。前述したお小夜をしたので踊る「お小夜節」、そして「麦屋節」へと続いていく。楽器を演奏する地方（ちがた）だけでなく、踊りも乱れることなく、しっかりと伝授されている様子がうかがえる。

続いて越中五箇山民謡保存会によって女性の麦屋節が踊られた。紋付き袴に脇差を差した男性の踊り手の後に、紫の着物に白いたすきをした女性の笠踊りが繰り広げられる。女性の麦屋の傘踊りを見たのは初めてのことである。

といちんさ節も女性の踊り手によって踊られる。トイチンサとは、五箇山に生息するサイチン（ミソサザイ）が樋やかけいを伝って餌をとる、といのサイチンの縮まった名称で、サイチンのように明るくてきばきとよく働くようにと願いを込めて口ずさんだといわれる労働歌で、労働がいかに重要であったかが理解できる。この踊りもこきりこや麦屋と同じく良く踊られる。それから先ほど平高校郷土芸能部によって踊られたお小夜節、なげ節か

ら牛追いの歌五箇山追分へと続く。なげ節も五箇山追分も牛方によって歌われた。牛方は峠を牛の背に荷物を載せて運び、ゆったりとした道で歌ったのはなげ節で、坂道にさしかかった時に歌ったのが追分節といわれる。牛方は五箇山から城端まで木炭、和紙、絹などを運び、帰りは城端から米、日用雑貨などを運んだ。男性の踊り手は法被姿で手に縞模様の手帯を持ち、それを振り回しながら踊る。女性はといちんさの時と同じ仕事着で手踊りである。



写真は、平高校郷土芸能部によるこきりこ。女性の踊り手による麦屋。こきりこ唄保存会による神楽舞。

越中五箇山こきりこ唄保存会による神楽舞が次に演じられた。烏帽子狩衣姿の女性が踊り始める。それに続いて頭にかずら紐を巻き、シデ紐を持った女性の踊りと男性の手にさらを持ち、綾蘭笠、直衣指貫という衣装で、迫力満点の踊りが繰り広げられる。それから越中五箇山麦屋節保存会による麦屋節が女性の踊りも含めて踊り始める。先ほど神殿で奉納された早麦屋を再度披露する。これは女性のかいがいしさを讃えた仕事唄である。それから「古代神」(こだいじん)は、以前、こきりこ祭りで見ることがあるかもしれないが、記憶になかった。五箇山から飛騨白川郷に伝わった踊りで、いでたちは麦屋の時同様、紋付き袴に脇差を差し、編み笠を廻して踊るのである。四つ竹節は、女性の踊り手がオレンジ色の直衣指貫という格好で、四つの竹を打ち鳴らしながら、あでやかに踊る。それから「小代神」は、先ほどの「古代神」と同じ衣装の踊りで、その後の「文句入り麦屋節」は歌詞が字余りになっているのである。

こうして舞台共演を終了し総踊りといって、観客も踊り手と混じって麦屋節を踊るのである。こきりこ祭りに参加した時も、最後にさらを貸してもらい、私もほかの客と混じって、踊り手から教えてもらいながら踊ったけれども、さすがに麦屋節はかなり運動神経を要するように見えたし、もう夜も遅いので、宿に迎えの手筈を取った。

九月二四日(月)。麦屋祭り二日目。

この日は一四時から越中五箇山麦屋節保存会による、男性の傘踊りが先ず披露される。その後笠踊りコンクールというのが開催される。一般の客が踊りを舞台上で披露するのであり、舞台の下には先ほどの保存会の踊り手が踊るのである。皆、上手に踊っており、いわゆる全く踊ったことのないど素人の参加は当然のことながらない。

この後は昨日も行われた「もみじ民謡会」と「越中五箇山麦屋節保存会」による踊りが行われる。

舞台共演が一八時三十分からなので、それに合わせて宿に戻って早めの夕食にしてもいい、再度宿の車で下梨に舞い戻ったのである。

舞台共演の最初は「五箇山民謡清流会」といって、平高校郷土芸能部のOBたちによって結成された会であり、「麦屋節」、「お小夜節」、「早麦屋」、「こきりこ節」と立て続けに踊りが披露される。二日目の見どころはゲストで参加している隣町で同じく世界遺産の岐阜県白川郷「白川村荻町民謡保存会」とやはり五箇山の隣、利賀村(とがむら)「利賀むぎや節保存会」の舞台演出である。白川郷も五箇山と同じく平家の落ち武者伝説のある所であり、「白川手踊り」と「白川おけさ」が公開された。ナレーションの説明によると、「おけさ」とは、綺麗な女性のことを意味するという。「といちんさ」の時と同じ作業着を着て、笠を廻しながらてきぱき踊る。こきりこ祭りの時も、白川郷の民謡は見たことがある。やはり同じく世界遺産であり、隣村ということもあって、交流があるのかと感じた。利賀の踊りは今回初めて見た。利賀のこきりこは「七寸五分」ではなくて「七寸三分」だという話も伺った。利賀の長麦屋節は、オレンジの着物を着た女性と、かざらひもを頭に巻き、青緑色に白の着物を着た女性の傘踊りである。同じ「長麦屋」でも、衣装は全く異なるのである。次の「こつきりこ」(利賀ではこういうらしい)では、五箇山で何度も目にする、勇壮な「こきりこ」とは違い、あねさんかぶりをした女性たちがこきりこの竹を鳴らしながら踊るのである。「こつきりこ」のメロディーも、私が聞いて知っているあの有名なこきりことは全然異なるのである。「麦屋節」の衣装、笠踊りは同じなのだが、やはり麦屋節も途中で急に早くなるのである。



利賀村の麦屋節と、「こつきりこ」。一番下は白川郷の白川おけさ踊り。

「小谷麦屋保存会」は五箇山の庄川下流の小谷地域の踊りで、「おたん」と読む。これもと
いちんさのように作業着姿の女性によって女性によるゆったりとした踊りである。

この後は越中五箇山麦屋節保存会による麦屋、早麦屋、古代神など、昨日と同じ踊りが
続けられるので、詳細は割愛する。また舞台共演の後、総踊りが行われるのも一緒である。
当然、私は踊らずにすぐに宿に帰った。

こうして、麦屋祭りは終了したのである。こきりこや麦屋、といちんさなど普段五箇山
で目にする踊りから、古代神、小代神などの余り見たこともない踊り、更に前述した白川
郷の踊りや利賀村の少し異なった踊りも比較しながら楽しめるのである。運動神経に自信
があり、民謡や踊りの好きな方は、最後の総踊りや、笠踊りコンクールに参加してみるの
もいいかもしれない。

追記。

今回も、麦屋祭り以外に五箇山で体験したことを書いておく。

相倉合掌造り集落内に「勇助」という大きな合掌造りの民宿がある。ここが今年の四月
から内部公開を始めた。加賀藩の宮大工による匠の技を間近で感じることができる。明治
元年に建てられたので、約一四五年を経過している。各部屋には順番通りに従って見てい
くようになっていっている。囲炉裏の前で他の見学者や宿の主人と語り、二階の屋根裏部屋に
は五箇山の四季を写した写真の数々や、民具が展示してある。主人の池端滋氏は写真家で
ある。事前予約は必要ないから、相倉に来たら気軽に入室することができる。時間は一〇時か
ら一五時まで、料金は大人三〇〇円、小人一〇〇円。休日は火曜とお盆、正月、その他家
や村の行事の時である。民宿でもあるので泊まることもできる。



合掌造り民宿「勇介」の外観、室内の一部、二階屋根裏部屋に展示してある写真の数々。

私が今回泊まった「弥次兵衛」のある上梨地域から少し奥に入った所に大きな旅館「五箇山荘」(ごかさんそう)がある。私は弥次兵衛に泊まった時は、この温泉を利用していただいた。去年見に行った南京玉すだれ全国大会を主催していた南京玉すだれ協会の方と五箇山荘の取締役の大瀬雅和氏が顔見知りで、何度か弥次兵衛に来ていたので、私も大瀬氏と顔見知りになった。親戚の大瀬國隆氏とも顔見知りになったので、いつか五箇山荘に泊まろうと思っていたが、いかせん値段が高くていつも見合わせていたので、今回は給料取りになり、若干旅費に余裕ができたため、最後の一日を五箇山荘で過ごした。五箇山荘は高台にあり、宿から上梨地区がパノラマ風に見ることができる。部屋もゆつたりとして落ち着いており、温泉と夕食は清流懐石で、南砺市産こしひかり、イワナの塩焼きや秋野菜の天ぷら、牛朴葉味噌焼きなどが楽しめる。思い切って泊まってよかったと痛切に感じた。来年も予算に余裕があったら、是非泊まりたい。

一〇月一三日と十四日、神奈川県川崎市立日本家園にて五箇山の観光PRと物産販売が行われた。川崎市立日本家園には、「江向家」を含め、四件の合掌造り民家が移築展示されている。中にはダム建設のため湖底に沈んだ桂集落にあった「山田家」、利賀村から移築した「野原家」があり、いずれも国や県の重要文化財に認定されている。合掌造りの隣に「佐々木家」があり、庭で麦屋節とこきりこ節、といちんさ節が披露された。まだ五箇山から帰ってそう日が経っていなかったため見に行った。当日その場所は五箇山民謡が流れ、五箇山の物産が販売されており、五箇山のお土産屋さんにも入り込んだような錯覚に陥った。また五箇山の定番、イワナの塩焼きも販売されており、周囲ににおいが充満していた。麦屋節の踊り手の一人が、私がお世話になった「弥次兵衛」の息子さんであることが分かり、終わってから挨拶をしに行った。移築されたとはいえ、合掌造りを背景に懐かしい踊りを拝見して、有意義なひとときを過ごすことができた。



各種データ

越中・飛騨観光圏 五箇山観光総合案内所

電話番号 〇七六三・六六・二四六八 FAX 〇七六三・六六・二四六九

営業時間 午前九時から午後五時まで。年末年始も開館。

URL <http://www.gokayama-info.jp/>

合掌民宿「勇助」

電話番号 〇七六三・六六・二五五五 FAX 〇七六三・六六・二五七八

一泊二食 大人八四〇〇円、小人六八〇〇円。冬期は暖房費として五〇〇円。

URL <http://www.2.ne.jp/~dhayashi/>

五箇山温泉・国民宿舎 五箇山荘

電話番号 〇七六三・六六・二三一六 FAX 〇七六三・六六・二七一七

一泊二食、入湯税込、一二七五〇円（タイプ別部屋により、若干料金が異なります。）

チェックイン 午後一五時。チェックアウト 午前一〇時。

URL <http://www.gokasansou.com/>

川崎市立日本民家園

電話番号 〇四四・九二二・二二八一 FAX 〇四四・九三四・八六五二

開園時間 午前九時三〇分から午後一七時まで。（十一月～二月は午後十六時三〇分まで）

入園料（ ）内は団体料金。一般五〇〇円（四〇〇円） 高校・大学生三〇〇円（二四〇円）

川崎市在住の方、中学生以下、障がい者は無料。

休園日 毎週月曜日。（月曜日が祝日の場合は翌火曜日）。祝日の翌日（祝日の翌日が土・

日の場合は開園）。年末年始。

URL <http://www.city.kawasaki.jp/880/> 川崎市教育委員会、日本民家園。

合掌民宿「弥次兵衛」

電話番号 〇七六三・六六・二六三九 FAX 〇七六三・六六・二九一五

一泊二食 七三五〇円